



季刊

弥生の出雲王に出会える



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

第32号

(2019年1月)



出土した「一字一石経」の一部

★速報展

「石に願いを」 — 出雲大社

境内遺跡の調査から

好評開催中 2月4日(月)

今回の速報展は、2016・

2017(平成28・29)年度に実施

した、出雲大社境内遺跡の発掘調

査の成果を展示しています。

境内遺跡は、2000(平成12)

年に発見された、巨大な「三本柱」

(中世期本殿の柱)でも知られてお

り、地中には出雲大社の長い歴史

がそのまま保存されています。

調査は、出雲大社境内の建物建

替えに伴うもので、境内の発掘調

査では初めて「一字一石経(以下、

「石経」)が出土しました。



「開」と墨書された「一字一石経」(長さ4.7cm)

「石経」は、5センチほどの扁平な小石に仏教の経典を一字ずつ書写し、それを土中に埋納したもので、書写した人の願いが込められています。

このような仏教に関連する遺物が、神社の境内から見つかるのはなぜか。その理由は出雲大社の長い歴史の中にあります。

それは、戦国時代から江戸時代初め(16世紀〜17世紀初め)頃、出雲大社の境内が仏教色を強く帯びていた時代に関係します。「石経」は、この、わずか100年間余りの歴史の産物と考えられます。

展示では、「石経」を手掛かりに、この時代を概観するとともに、当時の人々が出雲大社へ「石経」を奉納した背景について紹介します。

(原 俊二)

★春季企画展

ふるさと今昔物語 その3

— 平田地域 —

3月9日(土)〜5月20日(月)

【入場無料】

「ふるさと今昔物語」として、これまで佐田地域、多伎地域、湖陵地域の歴史を紹介してきましたが、今回は平田地域を取りあげます。

戦国時代、上洛の帰りに平田に立ち寄った薩摩の島津家久は、宍道湖の湖面に蓮の花が咲き乱れる中を、まるで仏様の舟に乗っている気分で漕ぎ進み、平田の町に着いたと述べています。そして、瓜や酒が振る舞われ、家久は一泊して、翌日、出雲大社へ参詣しました。

この記述から、当時の平田が宍道湖岸の町場として発展していたことがうかがえます。同じころに著された中国・明の『籌海図編』にも「ひらた」を示す「非頼打」と記されていて、海外にも知られていたようです。

平田地域は、古くから人やモノが行き交うところでした。今回は、平田地域と他地域とのつながりに注目します。

(高橋 周)

★ミニ企画展

出雲を掘る 第7話

「小山遺跡―発見から70年―」

好評開催中〜2月4日(月)

【入場無料】

現在開催中の展示では、出雲平野の中央にある「おやま」ムラが、弥生時代から中世に至るまで、盛衰を繰り返していたことを紹介しています。

「おやま」ムラで人々の活動が盛んであったとわかる時期の一つが、飛鳥時代から奈良時代です。

小山遺跡の北部では、当時の建物や溝、井戸の跡が見つかっていて、それらは奈良時代の半ばから後期の間に、建て替えや掘り直しが行われたようです。その中でも井戸は、小山遺跡の中央を弥生時代以来流れていた河川がこの頃には湿地となったため、新たな水源として掘られたと推測されます。食器などに使われた当時の須恵器や土師器も多数出土しています。

また、小山遺跡では文房具に使った須恵器や墨書土器が見つかっています。その中には、飛鳥時代に朱墨しゅぼくを使ったことがわかるものもあります。朱墨とは、ベンガラといった赤い顔料を膠にかわで固め



文房具に使われた須恵器
(左側手前の破片に朱墨が残る)

た墨で、紙の帳簿に照合した印をつけるときなどに使われました。飛鳥時代から奈良時代初めにかけて、文字を使った政治が全国で行われるようになりましたが、「おやま」ムラでも飛鳥時代には文字を書く人がいたことが分かります。奈良時代、「おやま」ムラの人々は神門郡八野郷かんのこやののさとに編成されたと考えられます。役所ではなく、出雲平野の一集落だった「おやま」ムラで文字を書いたのはどのような人で、何のために文字を書いたのでしょうか。

(高橋 周)

★ギャラリー展IV

「はかりの歴史―世界と

つながる島根のおもり―」

好評開催中〜2月25日(月)

【入場無料】

今年の世界計量記念日の5月20日に、「1キログラム」の定義が見直され、元素の量を基本とする新たな定義に移行されます。人間社会は、モノを「はかる」ことにより進歩し続けています。今回の展示は、重さを調べる「はかり」にスポットをあてました。

日本では、弥生時代から江戸時代にかけて、天秤てんびんばかりと棹さおばかりが使われてきました。明治時代になって、上皿天秤、台ばかり、ばねばかりなどが西洋から導入され、近年では、電子ばかりが普及



銀をはかった銀ばかり
(右はケースの刻印)

し、誰もが気軽に重さをはかることができるようになりました。

ここでは、江戸時代に銀の重さをはかった銀ばかりを紹介しています。写真は、斐川町で使われていた民俗資料(県指定文化財)です。ケースやおもりに付けられた「極」・「定」の刻印から、18世紀後半頃に使用されていたものと今わかりました。会場には各種のはかりが展示してあります。実際に重さをはかってみませんか。
(坂本豊治)

★ギャラリー展V

「こしムラ」のレキシ(仮)

2月27日(水)〜5月27日(月)

【入場無料】

神戸川左岸に隣接する古志遺跡群は、古志地区と神門地区にまたがる遺跡群で、その広さは60ヘクタール(出雲ドーム37個分)に及びます。

近年、県道改良や放水路建設に伴って、集中的に発掘調査が行われた結果、弥生時代の大集落や、奈良時代の役所があったことが明らかになりました。

今回の展示では、これら注目される成果を紹介し、「こしムラ」の歴史を紐解きます。(三原一将)

★日本遺産

日が沈む聖地出雲の文化財
(第6回)

日本遺産「日が沈む聖地出雲」を彩る構成文化財紹介第6弾！

今回は、神宿る島「経島」に焦点を当てます。

①経島

毎年冬から初夏にかけて、繁殖のためにやってくるウミネコで活気づく経島。日本海側西部における一大繁殖地として国の天然記念物に指定されています。その最大の理由は、人が上陸してはならない神域として、経島が古くから守られてきたためです。

かつて、経島には「日沉宮」があり、『出雲国風土記』には「百枝槐社」の名で登場します。日御碕神社の社伝によると、948(天曆2)年、天皇の命令により現在地へ遷されました。今も島には「経



経島の位置



神幸神事

第2回日が沈む聖地出雲フォトコンテスト
優秀賞「神事」/撮影：出川正廣さん

島神社」がお祀りされています。

ちなみに、経島の名は、切り立った柱状節理の岩盤が、お経の巻物を積み重ねたように見えることから名付けられたと伝わります。

②神幸神事

経島を舞台に、毎年8月7日の夕刻に行われる日御碕神社の神事。初代祭主アミノフキネの御魂を移した神輿とともに日沉宮を出発し、神職と参列者が行列を組んで経島を望む日和崎のお旅所へ移動します。そこで宮司が祝詞を奏上するとともに、神職が経島へ上陸します。経島神社でも同時に神事を行います。

神事の最中に夕日が沈むことから「夕日の祭り」と呼ばれ親しまれる、日御碕の夏の風物詩です。

(景山このみ)

★のぼり旗を

寄贈していただきました

「明るいまちづくり」のため活動支援や奉仕活動等を行っている大津クラブ(代表 米原栄幹 幹事長)から「出雲弥生の森」のPR用のぼり旗(200枚)をご寄贈いただきました。



PR用のぼり旗

のぼり旗については、これまで、博物館がオープンした2010(平成22)年に、市民や団体・企業のみなさまからご寄贈いただいたものを設置してきましたが、長年風雨にさらされ、多くが傷み、数が減ってきていました。この状況を知った大津クラブから「当時作られたのぼり旗と同じデザインのものも補充するかたちで寄贈するので、有効に活用して欲しい。」とお話をいただきました。

のぼり旗は、これまでと同様にイベントのPRに活用してまいります。

この度の善意に心からお礼申し上げます。

★新人職員 ♡は見た!

4月から博物館で働いている職員です。普段は見る事ができない博物館の裏側を紹介します。

今回、紹介するのは、収蔵庫です。収蔵庫には三千箱以上のコンテナがあります。このコンテナはタテ38cm、ヨコ59cm、深さ15cmのプラスチック製の箱で、今までに市内で発掘した出土品が、地域や遺跡ごとに整理して保管してあります。無数の出土品があるこの空間には、まさに出雲の歴史が凝縮されています！



あなたを古き時代へ誘います!

収蔵庫は、年に一回、春の「弥生の森まつり」のときに見学することが出来ます。

ぜひ、収蔵庫を見学し、古代に想いをはせてみてください!

★博物館アテナダントコーナー

「エントランス航空写真」

あけまして

おめでとうございます



博物館に入るとまず目に飛び込んでくるのが、エントランスホールにある市内とその周辺の大型航空写真(タテ6.5m、ヨコ6m)です。約二千年前(弥生時代)の出雲平野の水域を青色で、集落の位置は赤色で色分けして表示しています。また、市内の古墳や史跡の場所も重ねて表示されていて、とてもわかりやすくなっています。来館者が遺跡をたどったり、我が家を探したりして、とても好評をいただいています。2階ホールから全景を見ることもできるので、ぜひ、ご覧になってみてください。



大型航空写真(縮尺1/6000)

★講座のご案内

▼ギャラリー展IV

●関連講座

1月12日(土) 14時

「中央アジアの分銅(6000

〜3500年前)を探る」

【講師】堀 暁氏

(田和山サポートクラブ

副会長・元古代オリエン

受講料 無料

▼館長講座

1月26日(土) 14時

第3回「石見国分寺を読み解く」

受講料 300円

▼文化財保護審議会委員講座

2月2日(土) 14時

「出雲人」

【講師】藤岡大拙氏

(荒神谷博物館館長・

松江歴史館館長)

2月23日(土) 14時

「伊勢神宮と出雲大社〜日出る

クニと日沈みのクニを巡って」

【講師】錦田剛志氏

(島根県神社庁理事)

3月9日(土) 14時

「大社・日御崎と中世出雲神話・神楽」

【講師】岡 宏三氏

(島根県立古代出雲歴史

博物館専門学芸員)

各回受講料 300円

★館長古来夢

59年前の1960年、南米チリでの超巨大地震が起した津波が太平洋全域を襲った。わが国にも大きな被害をもたらしたが、チリ最西端のイースター島ではモアイ像が大きく破壊された。

その33年後、私はモアイ復元プロジェクトの一員としてこの島に降りた。工事に先立つ発掘を手伝うためである。なぜ日本からか。あるテレビ番組で「クレーンがあればモアイを復元できる」という島民の声が紹介されると、香川のクレーン会社が資材と資金の提供を申し出た。そのため、日本からも参加した、というわけだ。

モアイは凝灰岩製の石像で、アフと呼ばれる基壇上に並んで建っている。島の中央の一つを除いて、みな海に背を向けて立ち、ムラのほうに顔を向ける。モアイには、サンゴの白目と黒曜石の黒目で作られた目が付けてあり、その大きな目でムラを見守った。人々はそのモアイを海に向こうから来た祖先そして神として崇めた、という。

復元対象のアフ・トンガリキ遺跡の発掘は、日本班とチリ班とに分かれて進めたが、図面の書き手は向こうが確保して回してくれない。仕

方なく自分で鉛筆を握った。困るのは高さを記入する時だ。器械をのぞいて数字を読み、記録してもらったのだが、お願ひするのは島の作業員さんだからスペイン語で言わないといけない。よく間違えてずいぶん笑われたが、おかげで仲良くなれた。

ひと月も島の人々と作業し、海を見ているうちに、この光景をかつて見慣れていたかのような不思議な既視感を懐くようになった。そして、すっかり島の住人気分になった頃、帰国の途に就いた。

サンチャゴ、フロリダ、シアトル、成田と旅客機を乗り継ぐ間、私に日本語で話しかける客室乗務員は、ついに一人も現れなかった。どうやらポリネシア人の血が表に出ていたらしい。(花谷 浩)

(発行) 出雲弥生の森博物館

2019年1月

〒693-0011
島根県出雲市大津町2760
(TEL) 0853-25-1841
(FAX) 0853-21-6617
(E-mail) yayoi@city.izumo.shimane.jp
<http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori>

- 入館料 / 無料
- 開館時間 / 9:00~17:00
(入館は16:30まで)
- 休館日 / 火曜日
(祝日の場合は翌平日)
年末年始

